

と齒をくいしばって、がんばりました。死にそうな子供をおんぶして汽車の中、船の中と苦しみながら日本の土をふみました。日本の島がみえた時の喜びと叫び、それぞれの思いが願いが一になって上陸したのであります。戦争の苦しさ、悲しさを、しみじみ想いおこしております。

引揚者の一人として

山形県 羽柴 芳太郎

日本国の隆盛と大和民族永遠の繁栄を願う新国家を満州の地に創る事が当時の国是であり百万戸移民の表現に向け計画は着々と進行中であった。私も海外進出の夢を抱いていたのでチャンスがあればと時の到るを待っていた。

昭和十三年秋、満州第五次朝陽屯開拓団の小学校長青山永次郎先生が開拓地の現況報告を兼ねて青年学校生徒に講演をされました。その時、開拓地にも学校があり二

世教育には是非教員が必要である事を力説されました。これ希望する我が道と、勿論青山先生の要請もあり渡満の決意をしたのでした。当時、日本内地は分村分郷移民の気運も高まり、その先鞭をつけたような格好で翌年三月、当時担任していた高等科第二学年の晴れの卒業式も待たずに渡満したのでした。現地には住宅もあり生活物資も何一つ不自由なものはないというので、家族同伴（妻と娘）で赴任する事にした。

新潟の港では長兄が涙の見送りをしてくれました。

目的地東安省の朝陽屯に着いたのが三月十日頃（昭和十四年）、校舎は建築の真つ最中で生徒は二十人位、全員寄宿舎収容、校舎の完成まで半年間は二十四時間教育そのものでした。おねしょする子、夜泣きする一年生もあり、ランプの下で風を取り一緒に風呂にも入り背中も流したものです。重複式か単式授業の連続でした。青年学校も付設されるまでに成長してゆきました。東方ソ連国境の山々を四里の近くに眺めて暮らした六年間はまったく平穩無事そのものでした。

大戦も終りに近づき、昭和二十年三月第六次竜爪在満

国民学校長を拜命し朝陽屯を離れる事になりました。三十二歳の時でした。

新設間もない学校ですからこの学校も色々な面で忙しさの連続が毎日でした。特に増産命令が厳しくて、高学年の生徒は応召軍人家庭への奉仕作業に狩りだされ勉強などはどうでもよかったです。朝陽屯からの引越し荷物も梱包そのまま八月を迎えねばならなかった。若い団員のほとんどが召集され残っているものは老人か婦女子子供位だったのです。私達も早朝から奉仕作業には出役しましたが、中々応召家庭全部には回りかねていました。

やがて八月十日を迎えましたが、学校裏の畑に未明、爆弾の雨が降ったのでした。破片の文字から正しくソ連製だと判断がつかしました。不可侵条約を信じていた私たちには全く寝耳に水、青天の霹靂でした。毎口のように対策は協議されたが名案一つなく屋根に青草を載せる位が関の山でした。

八月十三日、朝一時、避難の指令が出され夏服姿で二、三日分の食料と日用品を馬車に積んで住み慣れた第二の

故郷を後にしたのでしたが、これが永遠の離別になるうとは誰が想像したでありましょうか。

一週間十日と経つうちに栄養失調者も出始めました。丁度秋の収穫期でしたので先発して通った方はほとんど作物を掘り尽くしており、一日でも遅かった者のためには一粒の馬鈴薯も残されてはおりませんでした。我々はポミーの芋をかじりながら、泥水を飲みながらの毎日でした。八月も末ごろになるとほとんどの乳飲み子はやせ細り死んでゆきました。私の長男（生後一年）も九月の声を聞かずに死にました。一か月も野原や山中をさ迷い逃げ回り、揚げ句の果て山狩り部隊に追い回され、ついに家族四人を見失い我一人になってしまいました。大声で呼び探しましたが遂に探しだすことが出来ませんでした。

立古収容所に入れられ少しでも暖かい所で越冬をと考え、ハルピン新京へと南下の許可を得ました。新京では八万人の日本人が凍死するであろうと野原に墓穴を準備したとのことを聞き、びっくり仰天しました。

二十一年四月から九月まで勤労奉仕隊の中隊長として

東遼河の鉄橋工事、新京飛行場の整備工事など強制就労時には戦場から死体搬まで夜中にも狩りだされました。

九月中旬工事終了。内地送還の声を聞いた時は本当に心の底から喜んだものでした。主客転倒の立場で、しかも慣れない労働には全く閉口の限りでした。工事完成祝賀宴に招待は受けたものの、毒酒など飲まされ故国の土を踏めなくなる心配もあり出席しませんでした。

十月半ばコロ島から佐世保へ、佐世保の山並みが見えた頃一同目頭を熱くしたものでした。佐世保から汽車で山形神町に四日後に着きました。南京袋で手製のリュック一つ（中身はほとんどボロ）が両親への土産でした。

妻や五人の家族を外地に残してきたことへの言い訳も出ず、自分の家にかかることすら遠慮して、先行する涙にはどうすることも出来ませんでした。妻子を殺して自分だけが帰ってきたのではないかと両親は疑いの目が晴れませんでした。引き揚げ後十三年目に妻子五人分の合同葬式もしてやり冥福を祈っております。

昭和三十八年夏、在満の妻から便りがあり、まだ私は生きていて、現在は再婚して現地妻となり三人の子供あ

るといふ。四十八年に一時帰国の許可が下り帰国しましたが老母はすでに他界していました。五人分の戒名を書いた位牌があるが満州には持って帰りませんでした。その後、音信不通となり消息不明でした。風の便りではもう亡くなったとのことですが戸籍はまだ東根市に残っています。

ハルピン駅の迷子を無事親元へ

山形県 結城 久子

私の夫は満州国協和会副参事で、東安省雞寧県事務長をしておりました。

昭和二十年八月八日夜、ソ連軍は空陸両面から越境侵攻の情報で国境の雞寧県は騒然となりました。

夫は県公署会議室にあって、久保田豊貞長、警察、開拓団、商工会、青年団、炭鉱、などの幹部約四十人が集まって相談した結果、軍の指示通り直ちに婦女子は、牡丹江方面へ南下避難させる。